

小宮豐隆監修

大谷篤藏・木村三四吾
今榮藏・島居清・富山奏
校注

校本芭蕉全集

第三卷 連句篇(上)

角川書店

校本 芭蕉全集
第三卷



昭和三十八年三月五日 初版發行
昭和四十三年八月二十日 再版發行

校注者

大谷篤藏・木村三四吾
今榮藏・島居清・富山奏

發行者

角川源義

印刷者

中内佐光

製本者

鈴木俊一

發行所

株式會社 角川書店

東京都千代田區富士見二ノ十三
振替口座東京一九五二〇八番
電話東京(265)七二二一(大代表)

Printed in Japan

曉印刷・鈴木製本

落丁・亂丁本はお取替へ致します

目次

概説

三

連句篇(上)

大谷篤藏
木村三四吾
今榮藏校注
富島居清
富山奏

三

凡例

二五

寛文五年

一 野は雪に

(百韻)

元

寛文七年以前

二 かたに着物

(付合)

四〇

三 後生ねがひと

(付合)

四〇

四 賤が寝さまの

(付合)

四一

寛文十年

五 君も臣も (付合)

六 拔ば露の (付合)

延宝三年

七 いと涼しき (百韻)

延宝四年以前

八 草の庵 (付合)

九 焼亡は (付合)

一〇 月の中の (付合)

二 松のこづえに (付合)

三 川かぜ寒き (付合)

三 たまのちぎりに (付合)

二四 むつくりと (付合)

延宝四年

五 五 五 五 五 五

四

三 三

一五 此 梅 に (百韻)
 一六 梅 の 風 (百韻)
 一七 時 節 嚙 (歌仙)

一五 充 公

延宝五年

一八 あら何共なや (百韻)

公

延宝六年

一九 さぞな都 (百韻)
 二〇 物の名も (百韻)
 二一 実や月 (歌仙)
 二二 色付や (百韻)
 二三 わすれ草 (歌仙)
 二四 のまれけり (歌仙)
 二五 青葉より (歌仙)
 二六 塩にしても (歌仙)

九五 二五
 二六 二六
 二七 二七
 二八 二八
 二九 二九
 三〇 三〇
 三一 三一
 三二 三二
 三三 三三
 三四 三四
 三五 三五

延宝六年以前

𠄎 あつたら真桑 (付合)

一五

𠄎 相場に立し (付合)

一五

𠄎 上は脇ざし (付合)

一五

𠄎 魚の腸 (付合)

一五

𠄎 大屋の退屈 (付合)

一五

𠄎 むかし語 (付合)

一五

延宝七年

𠄎 さゝげたり (表八句)

一五

𠄎 須磨ぞ秋 (百韻)

一五

𠄎 見渡せば (百韻)

一五

天和元年 (延宝九年)

𠄎 鷺の足 (五十韻)

一五

𠄎 春澄にとへ (百韻)

一五

𠄎 世に有て (百韻)

一五

𠄎 附贅一ツ (付合)

一五

𠄎 秋とはよ (付合)

一五

弄 鮭 の 時 (付合) 三〇
 空 塔 高 し (付合) 三〇
 六 はりぬきの (付合) 三一

天和二年

空 錦 ど る (百韻) 三三
 空 蒜 の 籬 に (付合) 三三
 空 花 に う き 世 (歌仙) 三三
 空 山 り い や よ (付合) 三七
 空 葛 西 の 院 の (付合) 三七
 空 も の ム ふ の (付合) 三六
 空 詩 あ き ん ど (歌仙) 三六
 空 飽 や こ と し (歌仙) 三三

天和三年

空 胡 艸 (歌仙) 三七
 七 夏 馬 の 遅 行 (歌仙) 二四一

貞享元年(天和四年)

三	栗野老	(付合)	二五
三	何となふ	(付合)	二六
四	はせを野分	(付合)	二六
五	宿まいらせむ	(付合)	二七
六	花の咲	(付合)	二七
七	師の桜	(歌仙)	二八
八	霜の宿の	(付合)	二九
九	能程に	(付合)	二九
〇	此海に	(表六句)	三〇
一	しのぶさへ	(付合)	三〇
二	狂句こがらしの	(歌仙)	三一
三	はつ雪の	(歌仙)	三二
四	つみかねて	(歌仙)	三三
五	炭売の	(歌仙)	三六
六	霜月や	(歌仙)	三七
七	いかに見よと(表六句)		三七

貞享二年

六	市人に	(付合)
允	馬をさへ	(付合)
七	海くれて	(歌仙)
八	檜笠	(付合)
貞享二年		
三	われもさびよ	(付合)
三	梅白し	(付合)
四	我桜	(付合)
五	榎の木	(付合)
六	梅絶て	(付合)
七	辛崎の	(付合)
八	何とはなしに	(歌仙)
九	つくぐと	(歌仙)
一〇	杜若 (二十四句)	
一一	ほととぎす	(歌仙)
一二	おもひ立 (十二句)	
一三	牡丹薬	(歌仙)

二六	二七	二八	二九	三〇	三一	三二	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇	四一	四二	四三	四四	四五	四六	四七	四八	四九	五〇	五一	五二	五三	五四	五五	五六	五七	五八	五九	六〇	六一	六二	六三	六四	六五	六六	六七	六八	六九	七〇	七一	七二	七三	七四	七五	七六	七七	七八	七九	八〇	八一	八二	八三	八四	八五	八六	八七	八八	八九	九〇	九一	九二	九三	九四	九五	九六	九七	九八	九九	一〇〇
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

貞享三年

二〇四 夏 草 よ (付合)

二〇五 独書をみる (付合)

二〇六 侘おもしろく (付合)

二〇七 榎木の風の (付合)

二〇八 小僧ふたりぞ (付合)

二〇九 我 恋 は (付合)

二一〇 薄をきりて (付合)

二一一 涼しさの (百韻)

二一二 目出度人の (付合)

二二三 日の春を (百韻)

二二四 花 咲 て (歌仙)

二二五 古 池 や (付合)

二二六 深 川 は (付合)

二二七 蜻 蛉 の (半歌仙)

三〇五

三〇六

三〇六

三〇七

三〇七

三〇八

三〇八

三〇九

三〇九

三〇〇

三〇〇

三〇四

三〇五

三〇六

貞享四年

- 二八 冬景や (三十四句)
 二九 久かたや (歌仙)
 三〇 花に遊ぶ (歌仙)
 三一 卯花も (付合)
 三二 時せよ (付合)
 三三 時は秋 (歌仙)
 三四 旅人と (世吉)
 三五 江戸桜 (半歌仙)
 三六 しろがねに (付合)
 三七 時雨く (付合)
 三八 京までは (歌仙)
 三九 めづらしや (歌仙)
 四〇 星崎の (歌仙)
 四一 置炭や (表六句)
 四二 麦はえて (付合)
 四三 やき飯や (表六句)
 四四 笠寺や (歌仙)

三八
 三九
 四〇
 四一
 四二
 四三
 四四
 四五
 四六
 四七
 四八
 四九
 五〇
 五一
 五二
 五三
 五四
 五五
 五六
 五七
 五八
 五九
 六〇

補注

貞享四年以前

一栗 かれ枝に
(付合)

一五 かしならば (付合)

一四　たび寐よし
（半歌仙）

一三 箱根越す (歌仙)

二三 霞かと（表六句）

四 旅人と（半歌仙）

一四 ためつけて
(歌仙)

三
元
風
の
(三十句)

三葉のむ (付合)

一毫磨なをす
(歌仙)

三 面白し (付合)

二五 幾落葉 (付合)

四一
四二

四九

四八

五

110

101

三九八

三九四

三九一

三九〇

三六

三八四

概説

一

連句の形式にはいろいろあるが、延宝末年頃までは一卷に百句を連ねる百韻が最も多く、それ以後は一卷三十六句の歌仙が次第に盛んとなる。これは、芭蕉の一座した連句においても同様である。

百韻は懷紙の横半折の折紙四枚を用い、はじめから順次初折・二の折・三の折・名残の折と呼ぶ。句の記載は、初折の表に八句、初折の裏より名残の表まではそれぞれ十四句ずつ記し、名残の裏は八句で納める。歌仙は懷紙二枚を用い、初折の表に六句、初折の裏と名残の表には十二句ずつ記し、名残の裏は六句で納める。なお、右の二形式のほかに、百韻の前半でとどめた五十韻、歌仙の前半で終った半歌仙、四十四句仕立ての世吉、あるいは表八句・表六句のみのものなどもあるが、その作例は少ない。また、それらのいずれにも属しない未完の端物の作品もある。

連句一卷においては、その第一句目を発句、第二句目を脇、第三句目を第三、以下を平句と呼び、最後の一句を拵句と称する。また、連句一卷を一人で作るのは特殊な場合であるが、それを独吟といい、二人の場合は両吟、三人以上の場合には、その人数に応じて三吟・四吟などと称する。且つ、「客人発

句亭主脇」と言つて発句を客が作り、その脇を亭主が付けるのが通常である。その場合、発句と脇とに挨拶の意の託されることが多い。また、第三以下を付ける順番は、連衆の年齢や俳歴、あるいは社会的地位などによつて最初の一順を定め、以下原則的にはその繰り返しの順で付ける。ただし、一順後、時には最初から、順番を無視して、出勝ちの乱吟とすることもある。また最初の一順に執筆の句の無い場合は、挙句は普通執筆がこれを勤める。執筆は単なる書記役ではなく、俳諧の式目作法に通じたものがその任に当るのが定めである。なお、連句における作者名の記載は、連衆が一順すれば、二度目からは一字をもつて略記するを通例とする。

連句一巻の運びにおいては、発句・脇・第三および挙句には、特に作法があつて注意を要し、また、平句でも月・花の句は特別に重視する。発句は十七音節の長句で、切字を伴い、表現の完結することを要する。また、必ず当季の季題を詠むものとする。脇は十四音節の短句で、発句の意を受け、これを継ぐように付ける。季は発句と同季にし、発句の季が三月にわたる時は、脇で当季を定める。なお、体言留めにするのが通例である。第三は転ずるをもつて本意とし、「て留め」「らん留め」を多く用いる。挙句は一卷の成就を慶祝する心をこめて、あつさりと巻き納めるのが普通であり、なお、後述のごとく、挙句の前は花の定座であるので、挙句の季は春になるのが通例である。月・花の句は特に風雅の大事として、それを詠むべき位置に定座を設ける。百韻では「四花七月」、歌仙では「二花三月」と称して、次のごとくその位置が規定されている。